

きつね よめい
狐の嫁入り (緒川)

緒川の山の中にある乾坤院境内のお稲荷さん
は、もと緒川城にまつられていたものです。日
ごろ、城主の水野氏をはじめ、家臣のものは、
武運長久の守り神として熱心におまつりして
いました。たくさんの召使いのきつねもおり、
戦場で敵に囲まれてあぶなくなると、どこから
ともなく狐が現れて、安全なぬけ道を教えて
くれたとのことでした。

徳川家康の母、於大は、緒川城で生まれ、こ

のお稲荷さんのもとで大きくなりました。

六歳の時刈谷城へ移り、そこから岡崎城主、

松平広忠のもとへお嫁入りをする日が来まし
た。

「申し上げます。すっかりご用意が整ってござ
ります。」

「では、出発いたそうか。」

行列が動きはじめようとしたときです。

「しばらく、しばらくお待ちください。」

片手にお稲荷さんのおふだをかかげた家来の
侍が、あわただしくかけつけました。



「両家の縁組に反対の者がいると聞きます。
途中、待ち伏せの危険もござります。どうか、
このおふだを……。」

「かたじけない。少し回り道になるが、安全な
野道を行くでしょう。」

秋晴れのよいお天気です。おてんとうさま
は、美しい花嫁行列をきらきらとお照らし
になりました。いちめんに彼岸花が咲いてい
て、まるで赤いじゅうたんでも敷きつめたよ
うです。

こちらは、岡崎に入る道です。於大の花嫁
行列を待ちぶせている一団がありました。
水野・松平の両家が結ばれ、勢力を大きく
されては困る反対勢力の侍たちです。

「いやにおそいじゃないか。」

「さては感^{かん}づかれたか。」

「いやいや、今^{いま}に来^くる。」

少^{すこ}しやきもきしはじめたそのときです。急^{きゅう}に

ばらばらと雨^{あめ}が降^ふりはじめました。雲^{くも}もなく、

おてんとうさまも、明^{あか}るく地^ち上^{じょう}を照^てらしている

のに、空^{そら}には、美^{うつく}しいにじもかかりました。

「日^ひが当^あたっているのに、雨^{あめ}が降^ふるとは……。」

侍^{さむらい}たちが、空^{そら}を見^み上^あげてわい^{わい}騒^{さわ}いでい

ると、ちようどにじのトンネルをくぐって来^きた

かのように、向^むこうから花^{はな}嫁^{よめ}行^{ぎょう}列^{れつ}が現^{あらわ}れまし

た。



「来^きた、来^きた。」

「とうとう来^きたか。」

「おのおのがた、油^ゆ断^{だん}

めさるな。」

一^{いち}団^{だん}の侍^{さむらい}たちは、

近^{ちか}くの木^こかげに身^みを

かくしました。そして、

じゆうぶんに近^{ちか}寄^よつ

たところで、一^{いち}度^どに、

とび出^だしました。

「花^{はな}嫁^{よめ}をうばえ！」

すると、どうでしょう。不思議なことに、い
ままで確かに動いていた行列が、影も形もな
くなっていくではありませんか。そればかりか、

あんなに降っていた雨もぴたりとやんで、おて
んとうさまだけが、あいかわらず、にこにここと

地上を照らしておいででした。

その騒ぎをよそに、野道を行つた於大の行列

は、無事岡崎城に入り、めでたく松平家と結ば

れました。そして、翌年、男の子が生まれ、竹

千代と名づけられました。その子が、後の徳川

家康であります。

このことがあつてから、日が当たっているの
に、雨が降ると、人々は、「狐の嫁入りがある。」
と、うわさしあうようになりました。



▲ うちゅういなりしゃ
宇宙稲荷社